

# 大柴杯スピーチコンテスト

実松 克義

大柴杯スピーチコンテストは立教の類まれなるイベントである。以下、このすばらしいイベントの紹介をしてみよう。

## 設立の経緯

このスピーチコンテストはどのように始まったのか。このコンテストが始まったのは今から3年ほど前、2000年度のことである。この年の4月、新潟県新発田市より一人の学生が本学の法学部に入学した。学生の名前は大柴利信と言った。彼は有能で活発な若者であった。将来は英語を使って世界に羽ばたく夢を持っていたという。入学すると、勉強のかたわら ESS のサークルに入るなど、文字通り充実した学生生活を送っていた。だが一悲しいかな一彼は在学わずか50日あまりで不慮の死を遂げることになる。

利信君が亡くなった後、ご両親の大柴利男、順子両氏は本学にご寄付をされた。その胸中は察するに有り余るが、本学の教育に役立てて欲しいということであった。生前の利信君が英語が好きで、また全カリの英語の授業を楽し

んでいたということもあり、寄付金の一部は英語研究室に配分された。英語研究室ではその使い方を巡って意見が交わされたが、この機会をとらえて今までにない新しい試みをしようということになった。それがスピーチコンテストの企画である。

利信君のご両親はその後も英語研究室にご寄付を続けられ、その結果スピーチコンテストを恒常的に開催する十分な基金がまとまった。ここにあらためて大柴利男、順子ご夫妻にお礼を申し上げたいと思う。

## 実施運営

さてスピーチコンテストは上級カリキュラムであるインテンシブ・コースの学生を対象として開始されることになった。そして大柴杯スピーチコンテスト (Oshiba Memorial Speech Contest) と命名された。

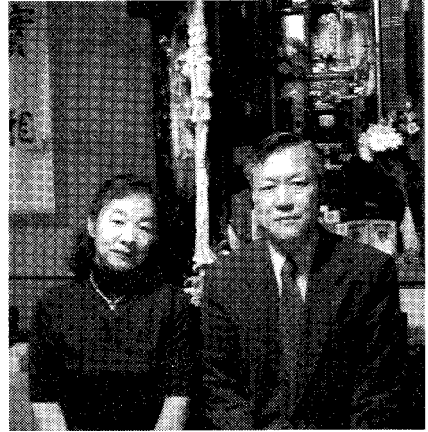
大柴杯スピーチコンテストは毎年一回後期に開催される。運営母体は英語教育研究室であるが、実際に企画実施するのは数名の嘱託講師で構成されるスピーチコンテスト委員会である。こ

こが中心となって実施される。その年の方針が決められ、参加者を募集する。参加者は各インテンシブ・クラスより、1名というのが原則である。スピーチの長さは5分を目途にしている。スピーチの審査は通常3名のジャッジが行う。優勝者には大柴杯カップ—実際に優勝者に与えられるのはそのレプリカであるが—と表彰状が授与される。

大柴杯スピーチコンテストはこれまで3回実施された。2000年度、2001年度、そして2002年度である。初年度は1クラス2名の参加が認められたため、13名もの参加があったが、その後は9名、8名と落ち着きつつある。実際10名以上の参加者があると、ジャッジにとっては相当に辛い仕事になるようだ。

### 今年度のスピーチコンテスト

今年度のスピーチコンテストは2002年11月30日（土）に開催された。開催を祝って庄司洋子全カリ部長が祝辞を述べられた。コンテストの参加者は8名、テーマはWorld Issues（国際問題）であった。8名の参加者はみずから、これらと思う国際問題について、5分間のスピーチを競った。非常に白熱した、手に汗を握る接戦であったが、見事大柴杯カップを手にしたのは川内亜矢子さんである。彼女のトピックはLand Mine and Afghanistan Children（地雷とアフガニスタンの子供たち）



大柴利男氏、順子氏ご夫妻

である。このスピーチは本稿の後に掲載されているので参照されたい。他のスピーチもまた内容のあるものばかりであった。トピックのみを列記すると次のようになる。“T B A” “Environmental Racism” “Biased Information by the Media” “North Korea” “Imagine Fight Against War-America & Iraqi Problem” “Gay and Lesbian Issues” “Education Problems in Asia”

これまで行われた3回のコンテストはどれもすばらしいものであった。出場者はすべてベストを尽くし、聴衆をうならせるスピーチも数多くあった。だが今年度のコンテストはさらにまた別な特色が加わったように思う。聴衆の積極的参加である。各スピーチの後でたくさんの質問がなされ、会場はさながら自由討論会の場ようになった。あまりに盛り上がったため、司会

進行係は途中で質問を打ち切らざるをえなかったほどである。

## コンテストの意義

大柴杯スピーチコンテストは意義のあるイベントである。私見を述べさせてもらえば、これには二つの理由があるように思う。

一つは一当然予想されたことではあるが一それが英語と異文化を学ぶことの強いモチベーションになっているということだ。スピーチコンテストの存在はインテンシブを履修する学生に、教室を超えた新しい刺激をもたらした。個人的なことになるが、13年前に本学に赴任して以来、これほどの情熱と熱狂を学生から感じ取ったイベントはほかにない。学生にとってスピーチコンテストはある意味で競争であり、チャレンジである。だがそれはポジティブな競争であり、チャレンジである。参加者はコンテストを体験することによって、教室では学べない、貴重な何かを学ぶのである。それは進歩へと続く道である。

もう一つはより大きなものだ。このスピーチコンテストは学外の篤志家による寄付によって設立され、運営されている。類似のものに冠講座があるが、同じような言い方をすれば冠スピーチコンテストとでもなろう。その意味でユニークなものだ。したがって立教の教育の一環であると同時に立教だけのものではない。いわば社会に向かって

開かれたイベントである。こうした活動はこれから増えてゆかねばならない。それは一大学という枠を超えて、大学教育をより豊かにするものだからだ。それはまた本学が目指す、リベラルアーツ教育の理念にも合致するものである。

## おわりに

大柴利信君の死は悲しい出来事であった。だがそれが結果としてこうしたイベントを生み出したのであれば、その死は無駄ではなかったことになる。彼の夢は生き続けている。

おわりに、このイベントの開催に尽力されたすべての方々にお礼を申し上げます。とりわけスピーチコンテスト委員会の皆さん、ジャッジの方々、また主役である参加者の学生諸君、そして聴衆の皆さんに。

大柴杯スピーチコンテストのさらなる発展を祈る。

さねまつ かつよし

(本学社会学部教授、  
英語インテンシブ・コース担当)